



# 校則見直しの活動を機に進む 生徒の力を引き出し伸ばす学校づくり

## 姉崎高校(千葉・県立)

学校が荒れていた時代の厳しい校則と指導方法が受け継がれていた姉崎高校。生徒主体の校則見直しを経て、生徒が本来もつ力を発揮する学校として進化を続けています。そのプロセスには、どのような生徒たちの取組と先生方の対応があったのでしょうか。

### こんな学校は必読!

- ☑ 校則が長期間見直されていない
- ☑ 生徒の主体性を発揮するきっかけづくりを模索中
- ☑ 生徒の参画による学校づくりを推進したい

取材・文／藤崎雅子

### 厳しい生徒指導の先に 思い描いた学校とのギャップ

約20年前、姉崎高校では厳格な生徒指導が行われていた。地域の人口減少に伴って生徒募集に苦戦するなか、生徒の風紀の乱れや問題行動が増加。県の指導重点校に指定され、学校を挙げて取り組んだことの一つが、軽微な規律違反も寛容せず罰すること。重大な違反を未然に防ぐ「ゼロトランス」の厳しい生徒指導だった。当時、生徒指導部長としてその陣頭指揮を執っていた加瀬直人先生(現校長)はこう振り返る。「真面目できちんとしている生徒が大半であるにもかかわらず、学校全体が地域や企業から厳しい目を向けられる状況をなんとかしたい。その思いで、『いつでも就職や進学の面接を受けられる姉高生でいよう』というスローガンを掲げ、必死に身だしなみの指導にあたっていました」

次第に生徒の問題行動は減少して学校は落ち着き、地域からの信頼を取り戻していった。2020年、十数年ぶりに同校に校長として戻ってきた加瀬先生は、平穏な様子に安堵する一方で、物足りなさも感じたという。

「最初の勤務時、厳しい指導の先に生徒が生きて学び、学ぶ姿を思い描いて取り組んでいました。しかし、実際はそうならなかった。生徒は言われたことはきちんと行うものの、指示されないと動かないところが気になりました(加瀬校長)」

学校が落ち着いたあとも、定期的な身だしなみチェックなどの厳しい指導は続い

図1 校則見直しの流れ(2021年度)



#### ① チームビルディング

生徒会と有志生徒でプロジェクトチーム結成。担当教員も「生徒の意見を尊重することを誓います」と先生宣誓。



#### ② 問題意識の共有

「ルールを変えて、学校をどうしたい?」を問いに学校の理想像について話し合い、プロジェクトのゴールを明確化。



#### ③ 校則に関する意識調査

全校生徒と教員を対象に、現状の学校や校則に対する考えを聞くアンケートを実施し、校則問題を可視化。



#### ④ 周囲の巻き込み

校則見直しの取組を伝える動画を作成し、校内で放送。先生に校則見直しに対する不安をインタビュー。



### School Data

1978年設立／  
普通科  
生徒数450人(男子236人・女子214人)  
進路状況(2023年3月卒業生)  
大学36人・短大10人・専門学校59人・  
就職45人・その他2人

### Outline

京葉工業地域の発展による人口増加に伴い開校。  
生徒数の減少のなかで生徒の問題行動が目立つ  
ようになり、2004年より学び直しの学習指導と徹底し  
た生徒指導の両輪で学校改革を推進。現在は地域か  
らの信頼を回復し、進路決定率は100%近い。2021  
年に普通科でモノづくりコースがスタート。第14回キ  
ャリア教育優良教育委員会、学校及びPTA団体等  
文部科学大臣表彰。



生徒会主顧問  
山村向志先生



生徒指導部長  
服部康隆先生



校長  
加瀬直人先生

ていた。スカート丈の規定など、むしろ厳格化したルールもあった。そのなかで、生徒は内面に不満を抱えつつ、「どうせ言っても変わらない」という諦めムードがあったという。

### 生徒の問題意識を基に始まった生徒主体のプロジェクト

そんな閉塞感を打ち破ったのが、21年度の生徒による校則見直しの取組だ。約1年間の取組を通じて、生徒の態度や行動が大きく変わっていった。

発端は生徒会役員の話し合いだ。学校の改善点を洗い出すなかで、「厳しすぎる校則を変えたい」という意見が数多く出た。「それには学校としての手続きを踏む必要がある」という生徒会主顧問・山村向志先生の言葉を聞いて、生徒たちは立ち上がった。「まず校長に要望を伝えよう」。資料を作成して校長室に乗り込み、「より充実した学校にするために校則を変えたい」と訴えた。加瀬校長は驚きとともに「これはちょっと面白いぞ」と思い、生徒の挑戦を促したという。

校則を変更するには、教員全体に働きかける必要がある。募集が集まった有志生徒と生徒会役員がプロジェクトチームを結成。認定NPO法人カタリバのルールメイキング支援事業を活用し、外部コーディネーターに助言をもらいながら校則見直しに取り組みむこととなった。プロジェクトのゴールを「先生と生徒が対立せず、生徒が主役になれる学校。個性が尊重される学校。より楽しい、自由になれる学

校」に定めて活動がスタートした。

### 多様な意見の教員と対話し生徒を巻き込み学校を動かす

しかしながら、教員が努力して受け継いできた校則と生徒指導の方針を変えることは容易ではない。学校や生徒を大切に思うからこそ、「校則を緩和すると再び学校が荒れてしまうのではないかと慎重になる教員も多い。

そこでまず取り組んだのは現状把握だ。全校生徒と教員を対象に校則に関する意識調査を実施。生徒の7割、教員の3割が「この学校の校則は不適切」と考えているという、校則への問題意識を可視化した。さらに、校則見直しに懸念や不安をもつ教員には、その中身をインタビューした。

「生徒は否定的な意見を言われてやる気をなくするのはと心配したのですが、むしろ『先生と本音で話せた』と非常に嬉しうでした」(山村先生)

インタビューからは、教員が「いつでも面接に行ける身だしなみ」を大事にしていることがわかった。それは具体的にどんな身だしなみなのか。生徒たちは学校外に出て適切な基準についてリサーチした。地域住民アンケートや街頭インタビューでは「スカート丈や前髪の規定が変わったとしても印象は悪くならない」という声が9割を超え、卒業生の採用実績のある企業からは「現在の校則より短いスカート丈やトップロックでも採用の不利にならない」との回答を得るなど、校則とのギャップが見えてきた。どついたら再び学校が荒れることへの

### ⑤ 地域・企業への調査



近隣の自治会に参加し、校則に関するアンケート協力を依頼。最寄り駅での街頭インタビュー、企業へのインタビューを実施。

### ⑥ 先生との対話会



スカート丈や髪型に対する考えや、校則を変えていくうえでの課題について、生徒と教員が校則について本音で話し合った。

### ⑦ 新校則の検討・提案



校則改定の草案を作成して職員会議に提出し、自らプレゼン。全校のクラスごとにワークショップを実施。

### ⑧ 新校則の試行・適用



2月を新校則の試行期間として設定し、本当に学校が荒れるかを検証。4月から正式に新校則を適用。



校則見直しを経て、生徒総会ではより良い学校にするための意見が多く挙がるようになった。



代表の生徒と教員が学校で話し合うオープン・ミーティング。

教員の不安を払拭できるのか。プロジェクトでは学年別に教員との対話を企画。改定前に試行期間を設けることや、写真等での基準の明確化など、教員側に配慮した案を携えて話し合った。それを踏まえた校則改定の草案をまとめて職員会議に提出。プレゼンテーションも行った。「生徒は先生方に伝えたいという気持ちが強く、堂々としたものだった」(山村先生)という。教員への働きかけの一方で、活動の初期から校則見直しの取組を伝える動画を制作して全校集会で放送するなどし、幅広い生徒の巻き込みにも力を入れていた。プロジェクトメンバーが司会となって全クラスにおいてワークショップを行い、変更を求め校則について議論したこともある。プロジェクトを応援していた生徒指導部長の服部康隆先生は、そのときの印象をこう語る。「『どうでもいい』という生徒が多いかと思いきや、積極的にさまざまな意見を言っ

いたのはちょっと意外でした。ルールを守ること自体には前向きな生徒たちがほとんどなのだ、改めて感じました」

1カ月前まわりの試行期間を経て、翌2年度から、スカート丈やツープロップ、靴下の色などに関する新校則がスタートした。生徒の活動は加瀬校長の期待を大きく上回るものだった。

「校則見直しの必要性は感じていたので、もし生徒のプロジェクトがうまくいかない場合は私が出ていく心積もりでした。しかしその必要はありませんでした。時に壁となる意見もあったことが、多様な視点で考えることにつながり、むしろ生徒を成長させた。機会さえあれば生徒は自ら伸びるのだと実感しました」(加瀬校長)

### 生徒の考えを否定せず 適度な距離感でサポート

生徒会顧問としてプロジェクトに伴走した山村先生には、校則変更という結果以上に、プロセスへの期待があった。

「社会科教員として主権者教育に関心があり、生徒が社会に出たときに市民として身のまわりの社会問題を主体的かつ協働的に解決していく力を育みたいという気持ちがありました。ですから生徒たちの学校に対する問題意識を引き出すなかで、校則への不満が鮮明になると、これは生徒が成長するよい機会になると思いました」(山村先生)

プロジェクトを最も身近に見守るなかでは、生徒の主体性を損ねないことを心掛けてきたという。

「生徒たちは時に突飛なアイデアも出しますが、否定せず後押しするようにしています。とはいえ放置するのではなく、手法についてアドバイしたり、事前に先生方と話し調整したりといったサポートは行いました」(山村先生)

その関わりは、プロジェクトが進むにつれて徐々に緩くなっていった。「最初のころは細かいアドバイスも行うことで道筋を作りましたが、後半には『これを実行するために必要なことは？』『どういう役割分担が必要かな？』などと投げると生徒自身で考えて取り組むようになりました」(山村先生)

生徒が困難にも立ち向かえたのは、活動が楽しかったからにほかならないという。「プロジェクトでは相手の意見を否定せず聞くことなどをルール化していました。言いたいことを言い合える仲間がいたから最後まで楽しくやれたようです。また、地域や企業の方たちから肯定的な声かけをしてもらったことで自信をもって取り組めたのだと思います」(山村先生)

### 「どうせ変わらない」から 「自分たちで変えられる」へ

校則見直しのプロセスを経て変化したのは、プロジェクトに参加した生徒たちだけではなかった。山村先生は、生徒全体に見られる変化の一つに「社会的自己効力感」の向上を挙げる。全校生徒への調査では、「プロジェクト実施の前と後で『自分や国や社会を変えられる』という回答は9%から25%に増加。変容した生徒は『自分た

図2 校則を見直す活動で学んだこと(生徒の声より)

- みんなで乗り越えるのがすごく楽しかった。達成感が大きかった。
- 自分たちでルールを考えることで、ただ守るだけじゃなくて、なんでそのルールがあるのかちゃんと理解することが大事だと思った。
- 普段厳しい先生と話をできたのは嬉しかった。今までは、ただルールを守らなくてはいけないという雰囲気だったけど、お互いに「ルールを守ろう」という雰囲気が生まれてきた気がする。
- 自分たちで決められるようになったから、学校が楽しくなった。
- 校則を見直したことで、社会のルールについても考えることがあった。自分が職場に出たときも、何か問題があったら変えるなどこの経験が役立つのではないかな。

ちの意見は受け入れてもらっていると実感した。「自分たちがやっていることが学校を動かしている」などとコメントした。学校や社会に対する意識が、「どうせ変わらない」から「自分たちで変えられる」へと変化してきているようだ。

また、課題解決のために必要な「ものごとを多面的に見る視点」や「根拠に基づいて主張する姿勢」が自立しようになったことも、変化の一つだという。

「意見や提案を出す際、メリットだけでなくデメリットも考えたり、異なる立場になって考えたりするようになったと感じます。また、全校生徒アンケートの「校則を見直す活動のなかで学んだこと」には「理由」「根拠」といった文言が目立ち、ものごとを動かすには感情や感覚だけでなく調査結果のデータや事実などの根拠が必要だということも学んだようです」(山村先生)





校則見直しの活動後、文化祭や体育祭では生徒主体の活動が増えた。

そんな生徒の新たな面を見て、対応方法を見直す教員もいる。

「以前は教員側が1から10まで用意しており、強い口調で指導することもありました。今は『どうするか考えて』と言えは生徒は自ら動きます。教員の方針は180度変わりましたね(服部先生)」

以前は「生徒に任せたら大変なことになる」という雰囲気があったが、今では「生徒の意見を聞くことでより良くすることが出来る」という認識が広がった。そのなかで生徒と教員の関係性にも変化が見られる。「生徒が多様な意見をもつ教員とも丁寧に対話を重ねた結果、教員側が決めた校則を生徒に強いるという構図に変化が生じ、さらには教員と生徒が対等に意見を言い合える関係性になってきたと感じています(加瀬校長)」

### 生徒と教員の対話会が定例化 学校行事は生徒主体に変化

校則変更後も、生徒主体で学校を変えていくという動きは続いている。以前と違い、生徒総会や全校評議会などで学校に対する要望や意見を聞くべくとたくさん手

が挙がる。23年度は新たに、学校の課題を定期的に話し合う仕組みとして、生徒と教員の代表が校則や学校運営について話し合う「スクール・メイキング・オープン会議」が立ち上がった。

9月に開催した初回では、生徒総会で出てきた意見を基にした「髪につけるリボンの指導基準」と「アイスの自販機設置」をテーマに、生徒会役員およびクラス代表の生徒、主任クラスの教員が意見交換を行った。生徒のアイデアで、最初に少人数のグループで話し合い、最後に全体で内容を共有するという、話しやすい雰囲気づくりの工夫もあった。このあと生徒会が素案を作成し、職員会議に諮る予定だ。取り組んでいる生徒会役員は、「先生方と生徒がきちんと話しながらお互いに納得の出来るルールを作りたい」と意気揚々と語った。

生徒主体で校則見直しが出来たという手応えは、学校行事の取組方にも影響した。文化祭では、これまで学校が安全性を重視して禁止していた企画も、生徒がやりたいと提案したものは排除せず検討するようになった。これまで段取りから運営まで教員が主導していた体育祭でも、生徒に任せる部分が増えた。近隣の中学校で行う学校説明会では、生徒が登壇して学校の魅力を語る。総合的な探究の時間の探究活動をはじめ、生徒たちが自ら地域に出て活動する姿は今や日常の光景だ。

### 生徒の力を信じたことが 主体性を引き出す第一歩に

「姉崎高校は変わったね」。地域からそん

な声が挙がるようになった。「学校全体が明るく軽やかになった」と加瀬校長。かつて思い描いていた学校の姿に近づいているという。このように学校を変えるほどの生徒の主体性を引き出すことは、特別な学校だからできたのか。山村先生は「どの学校でもできる」と力強く語る。「生徒はものすごいエネルギーをもっている」「生徒の潜在的な発想力や行動力はものすごい」「機会さえあれば、生徒は力を発揮するし、伸びる」…まず教員が生

徒の力を信じたことが、このような学校の変化につながったのだろう。生徒が本来もつ力を引き出し伸ばす学校へ、同校はさらなる進化を目指す。「生徒たちが予測困難な時代を生き抜くために、指示待ちから脱却し、自分の軸をもって身のまわりの課題を見つけて解決する力を身につけてほしいと考えています。失敗しても、そこから自己調整して学ぶことのできる機会をつくっていききたいですね(加瀬校長)」

## Interview

### 生徒会や地域での活動を基に起業の夢実現へ

動画編集が得意というスキルを買われて先輩に声をかけられ、生徒会の活動を行うようになりました。先輩たちがつくった生徒主体で学校を良くする流れを止めたくないので、昨年、先生方と対話するスクール・メイキング・オープン会議を立ち上げました。また、生徒会以外では、個人的に、さまざまなイベントを企画・実施する地域活動に参加しています。中学時代から将来の夢はIT系で起業することで、地域活動のなかでちょっとずつ自分の力を実践で試すことができました。春から大学生生活と並行しながら、起業の一步を踏み出したいと考えています。(3年生・元生徒会長 澤村柊人さん/写真左)

### みんなが楽しく通える学校にしていきたい

高校選びのとき、この学校は生徒会活動が盛んなことを知り、「生徒会長になりたい」という目標をもって入学しました。2年生の10月から生徒会長を務めています。人前に出る経験を重ね、今ではミーティングでも先輩たちをまとめるなど、人との関わり方は成長したと思います。スクール・メイキング・オープン会議の企画では、話しやすい場づくりについてみんなで考えて工夫しました。議題にしたテーマの実現に向けてがんばっていきます。これからもっとみんなが「学校に来ることが楽しい!」と思えるような学校にしていきたいと思っています。(2年生・生徒会長 相田空良さん/写真中央)

### 中学時代はできなかったことに挑戦



僕は高校生になってすごく変わりました。中学生のときは勇気が出なくて生徒会を諦め、ちょっと後悔していたんです。高校ではチャレンジしたいと副会長に立候補し、選出されることができました。人前で話すことに苦手意識があったのですが、自信がついてきて、だいぶハキハキしゃべれるようになってきたと思います。また、中学まではあまり勉強してなかったんですが、今は部活も勉強も力を入れています。(2年生・生徒会副会長 山口陸斗さん/写真右)